大遠忌参拝団に随参して

形山　俊彦

今年は大本山永平寺を開いた道元禅師の没後七百五十年にあたる。このため永平寺では、大遠忌に向けて国内外でさまざまな記念行事を展開してきた。いよいよ御正当を迎えて、春から秋にかけて、道元禅師を偲び、その鴻恩に報答する大遠忌の法要が連日のように永平寺で奉修されている。

期間中、全国の宗門寺院から選ばれた僧侶が「焼香師」として永平寺に拝登し、入れ替わり法堂で報恩法要の導師をつとめる。住職である禅師（貫首）に代わってのお勤めである。法要は早朝から夜まで何座も営まれ、山内大衆（指導者や修行僧）とともに、開山道元禅師がいますがごとく、真前に茶菓湯を献じ、香を薫じて御供養する。

善光寺の黒田武志住職も、その焼香師の一人として永平寺から拝請され、五月二十三日に九

十人にのぼる檀信徒の一団とともに永平寺へ参拝し、午時諷経導師の大役を果たした。

永平寺の大遠忌は開山道元禅師と二祖孤雲懐奘禅師のお二人について、五十年ごとに宗門を挙げて修行されている。私は昭和五十四年に奉修された二祖懐奘禅師七百回大遠忌を「中外日報」の駆け出し記者として取材したことを懐かしく思い出す。

門前に宿をとり、そこに臨時支局を構えて、二週間ほど詰めっきりで日々の大遠忌行事を追いかけ、取材した。連日、全国から焼香師が上山し、団体参拝が続々と拝登した。山内は随喜の僧俗であふれ、整然と諸行事・法要が営まれるさまは厳粛かつ壮観だった。

その頃はまだパソコンも普及していなかったから、一日が終わると宿に戻って記事を書き、それを列車便で京都本社へ送稿した。刷り上がった新聞がまとめて届くと、それをもって永平寺の山内各寮から門前の旅館や売店にまで配り歩いた。

この時の経験は私にとって、

まことに大きい。まさに大遠忌によって永平寺や曹洞宗との深い縁が結ばれたと言ってよい。道元禅師が日本曹洞第一道場として開かれた永平寺の七百年を越える伝統の重さ、ふところの大きさ、温かさというものを、この大遠忌取材を通して教えていただいたと思っている。

二祖懐弉禅師の大遠忌は「孝順心」がテーマだった。それは、日本達磨宗という大きな勢力をもつ教団の指導者であった懐弉禅師が、道元禅師の教えにふれ、門下を率いて道元禅師に帰依し、生涯を影の形に随うように捧げ尽くした姿を「孝順」の二字をもって表現し、その行跡を仰ぐものである。

今年の大遠忌のターマは「慕古心（もこしん）」。ここには、道元禅師の古風を慕い、その心を現代に宣揚し、わが身に実践しようという願いが込められている。

さて、私は善光寺・黒田住職の焼香師拝命に随喜する参拝団

に同行した。取材する側ではなく、大遠忌に随喜参拝する檀信徒の側から大遠忌に参加する機会を与えていただいた。このことは、はからずも私の二十年余に及ぶ記者生活を振り返り、自分が拠って立つものが何なのかをあらためて考える機会にもなった。

法堂に案内された一行は、雲衲から「道元禅師は礼拝を尊ばれた。礼拝は道徳ではありません。礼拝はお釈迦様から伝えられた仏法の中で最も大切な行持です。礼拝がなくなったら仏法もなくなってしまうとのお示しです」と威儀即仏法の道元禅の要諦を教わった。

伝統とは何だろう。七百五十年の法灯を今に伝える曹洞宗は、この大遠忌から何を学ぼうとしているのだろうか。永平寺法堂での法要に随喜し、参拝者の一人として真前に焼香礼拝しながら、私の胸裡をよぎったものは、道元禅師が永平寺に住したときの上堂の言葉である。曰く「たとい、衆多きも、しかも抱道の人なきときは、則ちこれを小叢林となす。たとい院小さきも、しかも抱道の人あらば、これを大叢林となす」と。

しかし、これはまだ記者としての第三者の目でしかない。お前はどうなのか、と問われるのがオチである。いま私の心中に響く言葉がある。道元禅師入宋の折、天童寺の老典座が若き禅師に向かって吐いた一言、「他はこれ吾にあらず」――私の人生は誰に代わってもらうこともできない。自分の人生は自分で切り開け――私にはこんな叱咤の声が聞こえている。